

〔覚書〕

私の思想に関する若干の覚書

石 瀬 秀 治

わが国の曾っての遺憾極りない15年戦争と私の青少年時代とは丁度符節を合することになっております。従って、同世代の大方のように、太平洋戦争開始翌年の昭和17年には召集をうけ、一旦は確かに戦死する覚悟もいたしました。然し、その後訓練中に発病のため、陸軍病院にて召集解除をうけ、暫くは戦死する運命などから逸れ、然し遂にそのまま富山で大空襲をうけて敗戦に出会うことになりました。ですから、私は、今まで41年間余り、富山大学関係では39年間、経済学科と経済学部では34年間にわたり、学びの窓で生き続けるという宿縁に会うことになったわけであります。そして、そうした宿縁のなかで、恰も私が召集を受けた際切り残しておいた遺髪を今もそのまま筆筒に仕舞っておりますように、私の何程かの思想の底には、多くの場合、特に、戦争、国家、世界社会、人間(悪)、愛、平和、死、運命などなどという問題にたいするそれなりの体験と反省が大きく蹲まることになってしまった次第のようであります。そして、又、それは今尚悲しくも厳しく迫るわが国の曾っての戦争犯罪にたいする私なりの反省や懺悔や告発という意味をもつもののように思われます。所詮、人間は一面において深く時代の子であり、環境の子でもあるという運命から免れて生きることは出来ないのでありましょう。

次に、私は、恐縮ですが、尚私ごとについて今少し率直に述べさせていただきます。私は幼少の時には浄土真宗関係の日曜学校に、又続いてキリスト教関係の幼稚園に通わされ、聽て人間として次第に目覚め長じていくにつれ、幸にも東西にわたる優れた良い書物をいか程か読みふけることに恵まれ、又社会の美し

い在るべき姿を些か夢想もしながら、その間縁ありて努めて人間を学び、自己を習い、我執を御する方向に進みはいたしました。然し非才凡人の私にはそうした偉人達人たちの教える崇高な価値（真善美聖愛など）志向の課する余りの負荷重荷の故にか、時には可成りの自己嫌悪や自嘲自罰自閉に陥り、又特に戦中や戦後には人や世（勿論私自身を含めての）のかずかずの不正、悪業、欺瞞、虚偽、傲慢、偏見、狂信、無責任などなどの故に、過度と思えるほどの人間嫌いや世間嫌いに喘ぎ、激しい時には自己や学問や教育にも絶望しかけ、可成り長い転々の模索のうちに、根本の思想としては多少の紆餘のうち遂に漸く仏教に所謂無や空の立場めいたものに近づき、唯今は自然法爾のような境位に些か従容とするようになりましたが、これは或は幾分かは既に風塵雨雪に老いるに至りたるによるものであるかも知れません。

次にここで尚更に私が曾ねてより思念しておりますことを若干ノートとして要約させて頂きます。私は長らく社会学や社会心理学を担当してまいりましたが、その究極の関心は人間生命体の心理的社会的精神的な構造の究明という人間学的関心であります。そうした関心に基づいて、私は昨今特に人間の心性の底にひそむ善悪の二律背反的關係とその根本悪の自覚の問題（パウロ、親鸞、カント）や個人と国家と人類世界の三一的な矛盾と統一の關係という問題（田辺元、種の論理）などに思いを寄せている次第であります。そして、それに関しては、私は、平易に言えば、人類史の現段階においては、社会体制の如何を問わず、凡ての人間の個々人としてのその正当にして基本的なる欲求や権利や自由の進歩向上は何所までも平等に尊重さるべきものであることは至極当然のことながら、然し同時にそうした人間個々人の自由の底にひそむ根本悪としての自愛や我執や驕慢に対する自覚や反省が極めて強く要請されるべきものであること、又社会には人間として誇るに足り、従って又生き甲斐のある慈悲や仁慈や福祉の層一層広く篤かるべきものであること、更に国家や世界には、反核や軍縮は勿論のこと、自今とこしえに貧困や戦争など決してあるべからずということなどという方向で考えているものであります。蓋し、個人の自愛や我執や増上慢と特

定金権支配集団による国家の独裁的軍国主義的政治と国際間における覇権的な一切の人倫を荒廃破壊せしめるにいたる非情無慙なる戦争などとは現代の人類社会における悪の最たるものなればなり、と考えざるを得ないからであります。

現代の世界史においては、大雑把に云えば、特にその政治や経済の面における民主主義や社会福祉に関する思想の発展と学問や文化の面における国際化による人類的普遍に関する自覚の進歩などの結果、われわれは最早単なる動物界次元における力が正義であるという思想とか、或いはその同じ延長線上にある力の均衡の論理のみに基づく疑似的な似而非平和に低迷していたり、又人類の閉じられた封鎖的割拠社会時代における戦国時代的やその後の帝国主義的な志向に時代錯誤的に停滞したままであることには満足できないのであって、更にそれ等の地平を超えて人間の叡智界秩序にふさわしい開かれた世界における国際連合や世界法に基づく真実の世界恒久平和を確立するということが最も緊急なる課題なのであります。

人類は、そもそもそれ自身生成死滅流転する運命をもつ太陽系内の惑星地球上に永い生命進化の歴史を経て現生人類であるホモ・サピエンスとして誕生して以来、漸く現代になって始めてそうした同じ祖先の共通の子孫としてこの地球上における世界の人類社会全体を有限にして掛替のないお互の緊密なる共存とその運命につながる場であり、従って又共同の重大なる責任と使命にかかわる協力と連帯の場でもあると深く真剣に自覚する方向に進歩してきているのである。それ故、現代においては、個々の人間が理性的道義的な主体としてそれぞれの種的國家を支担しながらもその際更に普遍的な人類社会を平和裡に整合していくという困難な三一的統合媒介の関係を志向し、更に言えば自愛や我執を御し、偏狭危険なる即自的な愛國のみに躊躇せず、博く世界に人類愛を統合的に実現し、そうすることに依って未開原始時代以来の対内的内部道德と対外的外部道德との矛盾背反する偏狭な閉じられた道德の二元性の立場を超脱し、開かれた普遍的な人類社会を実現する開かれた動的な内奥における真実の心情と魂による道德の立場に真実に目覚め、それを進展せしめるような視点や方策

を完成していかねばならないのであろうと思う。

愛の問題について言えば、それは日常可成りの場合その反対物である憎しみの心理と混淆葛藤していて、複雑厄介な様相を示すのであるが、ここでは唯それは一応人間が他者との一体的自己同一性において親和愛着する精神的感情的態度であると云っておこう。そうした場合、それは元来、系統発生的にも、又個体発生的にも、先ず血縁的な親子愛と兄弟愛や性愛を含む夫婦愛や閉じられた狭小なる血縁的地縁的な共同態などに始まるものと思われる。然し今日ではそれはその対象や範囲を次第に拡大し、その性格や内実を多少変容しながら、単に即自的にそれぞれの民族や国家の範囲に留まらないで、更に広く開かれた世界の人類社会全体にまで拡大深化させていくべきものであろうと思う。それが今後の世界史の重要緊急なる課題なのであり、そのためには当然偏狭危険なる即自的な自愛や愛国のみの立場が強く反省制御されていかねばならないものであることに注意したいと思う。遡って、繰返し言えば、地球上の人間は凡てホモ・サピエンスという同じ祖先の共通の子々孫々であることや「凡ての衆生は世々生々の父母兄弟なり」とさえ言われる所以を深く思念すべきであらうと思う。

もし、それ、人間や人類社会にして、上述の方向や目標にまで永遠に突破超脱することの出来ないものであるとするならば、それは遺憾ながらそれ程尊重に値し得、誇り得、生き甲斐のあり得るものでもない、と言われても仕方のないことになるのであろうと思う。

ところで、私がここに述べてきた僅かの思想ノートもその殆んど凡ては優れた先達先学たちの先蹤に負うものなのであって、新めて染々と「学而時習之、不亦悦乎」(学びて時に之れを習うは、亦悦ばしからずや)と思う次第であります。

私は、以上述べてまいりましたような思念や課題の実現完成を、私の生き甲斐のうちの重要な悲願として、例えその道程は遠いとしても、明日に待ち、明後日に望みながら、今後成程の学習を続けながら、又メモメント・モリ *memento mori* のうちに、更に巡礼行脚の心境で、自今の命を生きて参る所存であります。